



リハーサル風景。納得するまで確認する。



歴史民俗資料館で車人形の歴史に触れることができる。

「車人形は 文楽人形よりも 可能性を秘めた芸能」

いけがみ 池上 よしお 喜雄 40年前の復活公演の舞台に立った一人。普段の優しい表情とは裏腹に、車人形を操ると一変する。

「40年前の復活公演の日の心境・思い出を教えてください。」

「ありがとうございます。」

「復活した 竹間沢人形の灯を 消したくない」

4代目座元
まえだ ますお
前田 益夫

4代目座元だけでなく、里神楽の太夫でもあり、多彩な才能の持ち主。趣味は毎朝のウォーキング。



車人形の灯、再び

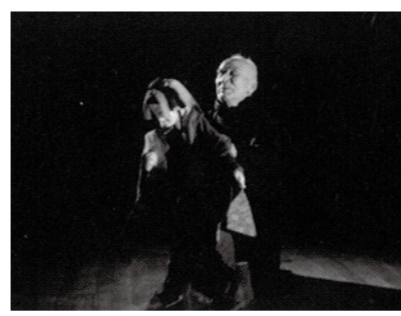
再び竹間沢車人形が脚光を浴びるのは、昭和46年に埼玉県教育委員会が実施した人形芝居用具緊急調査のこと。前田家の納戸の隅に置かれた箱から、車人形の芝居用具がほとんど欠損することなく発見されました。

翌年、竹間沢車人形は注目を集め「何とか再演できないものか」という声が高まっていきました。目が不自由になっていた近さんでしたが、再び人形を操ってみたいという熱意で、信次さんの子、前田益夫さん、地元の池上喜雄さんと共に練習の日々を重ねました。

その復活公演で車人形を演じた2人に当時の心境などをインタビューしました。

「復活公演に終わった、ぎっかけ」を教えてください。」

「最後にこれからの意気込み、竹間沢車人形への思いをお聞かせください。」



↑復活公演で人形を操る前田近さん

昭和47年復活公演

大正10年に最後の興行が行われてから50年後の昭和47年6月18日。半世紀ぶりに行われた復活公演当日は「甦る郷土芸能」と新聞報道され、町立中央公民館（当時）は200人を超える観客で大盛況となりました。

甦る車人形の鼓動

「昔は、車人形で遊んだものです。頭を使って脅かしたり、ロク口車に乗って遊んだりしていました（前田益夫さん）。」



右の写真の人形の腕には「信」の文字が。二代目座元、信忠さん（民部）が作った証が今も残されています。

「首、手足は初代の左近と二代目の民部が作ったと聞いています。人形の衣裳も同じく人形師が作りしました。車人形のロク口車は体格による差はなく、同じ規格サイズで作られています。それらを手直ししながら使われています。」



←興業の木戸札（現在の入場券のようなもの）歴史民俗資料館で展示中。